

知床・羅臼岳での携帯トイレ利用促進をめざして

村上 隆広（斜里町役場総務環境部環境保全課）

1. 世界自然遺産地域の山岳の現実

知床は、2005年7月17日に国内第3番目の世界自然遺産に登録されました。海洋と陸上の生態系が結びついた貴重な生態系と、絶滅に瀕した生物たちの貴重な生息地であることが、高く評価された結果です。しかし、この地域の山岳では、世界自然遺産登録地にふさわしくない光景が見られます。それは登山客によるし尿の跡です。水場や幕営地付近には臭気が漂い、高山植物群落が踏み分けられた先にはトイレトーパーと大便が散乱しています（図2）。特に、知床半島の最高峰である羅臼岳（標高1,661m）では、ここ数年でし尿の跡が顕著に増加したと感じられます。往復10時間程度の行程にもかかわらず、トイレが登山口にしかないためです（図1）。加えて、登山者の多さが状況をさらに悪化させていると考えられます。しかし、登山客数の増加は、世界自然遺産への登録と直接関係しているわけではありません。すなわち、羅臼岳入山者数は、遺産登録前の2004年から年間9,000人程度であり、登録後も顕著な変化は見られません（環境省調べ、図3）。し尿の状況は遺産登録以前から続いていたといえます。逆に、今後も著しく減少しないことも予想されます。世界自然遺産地域から3年を経た今、山岳のし尿問題の解決が望まれます。

2. 現在のトイレ事情

羅臼岳は斜里町と羅臼町間に位置しており、それぞれの町に登山口があります。そして、現在は斜里側の登山口である岩尾別温泉に2箇所、羅臼側の登山口である羅臼キャンプ場に1箇所のトイレがあります。岩尾別温泉には、かねてから山小屋（木下小屋）の脇に斜里町が整備した汲取り式トイレがあります（図4）。これに加えて、平成18年度に労働団体からバイオトイレ1基の寄贈を受け、登山口のバス停付近に設置しました。このようにトイレは2箇所になったものの、トイレ内の便座数が限られているため、夏の入山ピーク時には頻繁にトイレ待ちの行列ができてしまいます。なるべく入山前にトイレをすませてもらふことも、し尿対策の1つと考えられますが、岩尾別登山口については、利用者のニーズに十分に対応しきれていないのが現状といえるでしょう。

3. 知床国立公園の利用適正化と山岳のし尿問題

ところで知床では、環境省が中心となってまとめられた国立公園利用適正化基本構想が平成14年に提示されました。この基本構想では、知床国立公園を訪れる人々に対して、自然を十分に楽しんでもらう一方、自然への影響をできるだけ減らしてゆくことが目標とされています。また、国立公園のあるべき姿として、「原始的自然の保全」と「感動的な自然体験機会の提供」が掲げられています。山岳のし尿問題はまさにこの両者に該当する例と

いえませんが、この段階では、問題点・課題の一つとして指摘されるにとどまっていた。その後、国立公園の利用適正化に関する現地調査が行なわれるとともに、具体的な対策について議論が重ねられ、山のし尿問題もその重要性がクローズアップされてきました。平成 17 年 9 月に策定された知床半島中央部地区利用適正化基本計画においては、優先的に対策検討を進める地域の 1 つとして羅臼岳の登山道が含まれ、し尿対策も重要な課題と位置づけられています。さらに、平成 19 年度の知床半島中央部利用適正化実施計画では、「各種の情報提供により、し尿の処理に関する普及・啓発を進めると共に、知床ならではの良好な登山環境を維持・向上させるため、携帯トイレの導入について、具体的検討を行う」とされています。このような経過からも、知床国立公園で山岳地域におけるし尿対策について、早急に進める必要が高まってきているといえます。

4. 世界自然遺産登録と山岳のし尿問題

一方、世界自然遺産への登録とのかかわりについてはどうでしょうか。知床が世界自然遺産に登録される前年、2004 年 7 月に IUCN（国際自然保護連合）の専門家が知床を訪れ、世界自然遺産としての価値や、保全状況について調査を行いました。このときには、知床連山も 1 泊 2 日の行程で調査され、羅臼岳登山道がこの行程に含まれました。調査後、IUCN から日本政府に対して世界自然遺産登録に向けていくつかの課題が指摘され、IUCN との間で課題に対処するやり取りがありました。しかしながら、山岳での自然環境の状況については、IUCN とのやり取りには含まれず、主要なポイントにはなっていませんでした。そして、遺産登録に際して IUCN が作成した技術評価書においても、登山道における土壌侵食（soil erosion）が指摘されているものの、し尿問題については触れられていません。そのようなことから、概ね山岳地域については、知床の自然度の高さを示す部分と受け止められたと推測されます。しかしながら、世界自然遺産にふさわしいと評価を受けた知床の山岳の価値を守る意味でも、し尿対策を進めることはとても重要です。

5. 携帯トイレの導入に向けて

以上の経過をふまえて、斜里町は羅臼町と連携し、20 年度（今夏）から、羅臼岳での携帯トイレ導入に取り組むことを決めました。携帯トイレ利用者を増やすためには、まず入手しやすい環境をつくる必要があります。現在、携帯トイレは登山用品店や釣具店でも簡単に購入できますが、登山に行く前に入手できれば、より登山者は利用しやすくなることでしょう。そこで、販売場所として、登山口付近の山小屋、キャンプ場や宿泊施設、知床自然センター、羅臼ビジターセンターなどでの販売を想定しています。

使用した携帯トイレの回収にあたっては、登山口にあるトイレ近くに回収ボックスを設置し、その中に入れてもらうことを考えています。これまで携帯トイレ導入へのハードルとなっていたことでもありますが、内容物自体は回収できないため、内容の分別をお願いすることとしています。また、現在は斜里町・羅臼町ともにごみの回収は有料となってい

ますが、携帯トイレの場合は回収に料金をとることが困難です。携帯トイレは両町外でも入手できるため、購入時に料金を含めることができず、また回収時に料金をとるには、人件費などでかえってコストが高くなってしまいます。そのようなことから、当面は処理に係る料金は町で負担することとしています。

6. 今後の課題

携帯トイレの導入にあたって、回収システムの確立とともに大きなネックとなるのは利用率をいかにあげるかという点です。先に述べた購入しやすさもありますが、もっと重要なことは、携帯トイレの利用しやすい環境をつくることでしょう。その1つとして携帯トイレブースの設置が挙げられます。これは、携帯トイレを使える便座を用意し、外側を板や樹脂製のケースで囲うというものです。利尻山では、国立公園連絡協議会などによって、樹脂製の携帯ブース6基が設置されているそうです。このようなブースによって、植生を踏み分けることも少なくなるとともに、携帯トイレを利用することが望ましい山岳であることを登山者にPRすることにもつながります。しかしながら、これらの携帯ブースは1基20万以上とたいへん高額なものであり、また設置にヘリなどを利用すると、さらに莫大な費用を要します。このようなブースの設置は両町での整備が困難であることから、今後は関係機関に設置を要請してゆきます。

また、携帯トイレの導入が万能の解決策でないことも明らかです。すなわち携帯トイレの利用率が向上しない可能性も考えると、し尿が問題になるレベルの登山者の集中が適切かどうか、登山道途中への固定トイレ設置の可能性など、携帯トイレ導入以外の選択肢も常に意識しておく必要があるでしょう。しかし、まずはすぐにできることとして、今夏からの携帯トイレ導入促進に取り組んでゆきたいと考えています。今後、知床の山岳環境がより魅力を増すとともに、訪れる人によって自然が汚染されないように願っています。



図1. 知床連山と羅臼岳登山道（斜里側）



図2. 水場（銀冷水）のし尿の様子

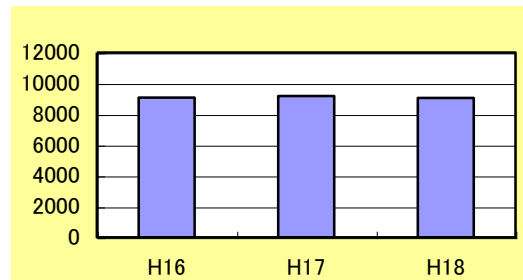


図3. 羅臼岳入山者数の状況（環境省調べ）



図4. 岩尾別登山口の汲取式トイレ



図5. 携帯トイレの形状（開いたところ）